地下聖家族

Grasshouse

父の異変

　失業してからパパはずいぶんとカッコ良くなった。
　おなかも引っ込んで体重も減ってきたし、顎のところのお肉もなくなって、とってもハンサムに見える。まだ保険会社に勤めていたころは、わたしの嫌いなこってりとした髪形だったし、いかにも中年のサラリーマンふうのメガネもかけていた。でもいまは違う。自由業、たとえば画家とか建築家や映画監督みたいな自由業の感じに見えるし、大体パパはそういう髪形や服装の方が似合うのだ。
　もともと昔からわたしはパパと一緒に歩くのが嫌じゃなかったけれど、最近はいっしょに手をつないで表参道あたりを歩きたいくらいだ。友達にいうとまた変態だのファザコンだのいわれるけれど、別に何をいわれても気にはしない。わたしが面白がって「ついこないだまで、パパとお風呂に入っていたんだぜ」と告白すると、みんな目を丸くし、眉を吊り上げ、救いようがないという顔をする。わたしはよく、ビニールの水色のアヒルをいじりながらパパの膝の上に片足をおいて、からだを洗ってもらっていた。
　もっとも、こないだというのはちょっぴり嘘で、望月美穂十三歳くらいのときまでだ。　それにしたって、わたしからお風呂に入ることをやめたのではなくて、パパの方がわたしのからだの変化に気づいて、顔を赤らめ一緒に入ることに照れてしまったクチなのだ。薄い毛がほんの少しまばらに生えてきたとき、パパの方が目をそわそわさせてそらすようになって、だからわたしも恥ずかしくなり、なんとなくお風呂のときはお互いを避けて気まずくなってしまった。それでなくてもパパはいつも、困ったような顔をしている。
　ヨーロッパの昔の映画に出てくる牧師様みたいに、人々の悩みを聞いて救ってあげたいんだけれど自分は無力でどうすることも出来なくてただただ憂い顔をしてみせる、というあのタイプである。今のトレンディドラマにはめったに出てこない顔だけど、昔のテレビドラマに出てくるような、眉と髭の似合う美形の山男の顔でもある。
　パパが一時の『中年太りなりかかり症候群』から脱して、もとのハンサムな牧師様に戻ったのは娘としても嬉しいのだけれど、でも最近ナンか行動が変なのだ。　世間が不景気だということぐらい、わたしみたいな中学生でも知っている。不景気ということは、おこずかいが貰いにくくなるとかレストランや旅行に行く回数が減るということだけじゃなくて、家族が不機嫌になるということでもある。
　けれどパパが、長年勤めていた大東亜生命という保険会社（テレビのコマーシャルで結構有名な企業だ）で首を切られるなんてことは、思ってもみなかったし、毎日肩を落として何か考えあぐねたような顔をしているパパの姿を見ると、わたしだって悲しくなって誰かにあたり散らしたくなってしまう。
　それで迷惑しているのは、牡猫のグレイで、わたしが何かというと蹴りを入れたり両手を無理やり万歳させてそのままストンと落としたりするので、最近は近づいてもこない。むかし雨の日に神社の裏で毛を濡らしてふるえて鳴いていたのを拾ってやったのだけど、いまでは生意気になってふてぶてしい近所のボス猫である。グレイというのは、毛の色が灰色であるのと、宇宙人の中で人間に悪さをする種族がグレイという名前なので、そこからつけたのだ。
　――寄り道をせずにパパの話をしよう。
　退職するのがきまった当時、はじめはなかなか家族に打ち明けるのをためらっていたみたいだ。パパはそういうことにひどく悩むタチなので、表情に出てしまう。ようやくママが切り出して、白状させたのだった。上司とうまくいっていなかったために、系列の関連会社への再就職も自分で断ってしまったらしい。地方の国立大学を出て会社でもそれなりに出世したし、家だってまあ芝生のある小さな庭もあるし、そんなに貧乏とはいえないだろう。パパは『愛社精神』の塊だったこともあるし、夕食のとき、テレビでパパの会社のコマーシャルが映ると、家族がなんとなく朗らかな気持ちになって食事が進んだものだ。そのＣＭは、女の人が表参道あたりでチワワを連れたお婆ちゃんと出会い、にっこりするのだ。そして『ありがとうの言葉を大切に。明るい未来の笑顔をつくる。―大東亜生命―』 というクサいナレーションが入るのだ。
「美穂。お前も女子大を出たら、大東亜生命に入るか」
　お酒が入って機嫌のいいとき、パパは思わず口に出さずにいられなくなって、そんなことを口走った。
「やよ。保険会社って、ダサイもん。あたし、ツアーコンダクターがいい」
「そんなことはないぞ。なかなかウチは、さばけた人間が多くて、案外庶民的な企業なんだぞ」

「どうでもいいの、そんなことは。でも、あのＣＭのお姉さんは、けっこう好き」
「そうか。（とパパは我が意を得た表情で顔をほてらせる）あのタレントは、うちの、か、会長の鶴の一声で決まったんだよ。電通が推薦してきた何とかいうハーフの歌手を蹴ってね、彼女に決まったんだというわけなんだ」
　パパは会社をあそこまでのものにした禿げの会長に心酔している。でも、わたしには、いつも酸っぱい梅干を食べたような顔をした、ただの頑固爺じいにしか見えない。
　その頃のパパにとっては大東亜生命は偉大な企業であり、その一員であることは、家族にとっても名誉で誇り高いことであるらしかった。丸の内に聳えるギリシャ建築のモノマネみたいな古風な白亜の建物。大東亜生命の建物は、インチキなくせに太い柱で妙な威圧感があるのだ。小さい頃パパの転勤で何度か転校されられもしたのでパパの会社に対してあまりいい思い出はない。
　この不景気になってから、パパは額に皺を寄せて黙り込むようになり、いままで決して会社の悪口を言わなかったのに、お酒が入るとしばしば上司のことを「あの人は結局、男らしくないナサケナイ奴なのさ」とか「支店長は、俺をわざと孤立させせようとしているんだ」とかなじるようになった。
　辞める直前の頃はもう会社も休みがちで、痩せて人相も変わり、朝からパチンコ屋に行ったり、映画を見たりしていた。公園で浮浪者に話しかけて、えらく感銘を受けたりもしていた。そんな日は感に堪えたような目をして「今日は、ほんとうの人間に出会った」などと馬鹿なことを言っていた。
　そのうちパパが大好きなあの女の人の出てくるＣＭが映っても、チャンネルを廻してしまうようになったし、仕事のことも話さなくなり、わたしとお風呂も一緒に入らなくなった。だから決して、わたしに毛が生えてきたせいばかりじゃないらしい。
　パパがこっそりと夜中起き出し、何か妙なことをやっているということにわたしが気づいたのは、住宅街と大学を結ぶ通りの桜並木が、ふわふわとした薄桃いろの雲みたいな感じで咲き始めた小雨がちの季節だった。

スコップ

わたしは川沿いの柳の樹が、明るい緑色の繊細な葉をすいすいと出しはじめる季節がいちばん好きだ。でもそんな季節は、鼻が敏感になりいろんな匂いが気にかかり、おまけになんだか疲れ易く、とんでもない失敗をしてしまうときでもある。きっと空気の中に、細かい花粉や虫たちの精子やいろんなものが混じり合い、土の中にも生き物の卵が生みつけられて、そこからもやもやと立ちのぼる蒸気がみんなをそわそわとした変な気持ちにさせるからだ。

あるとき、夜遅くまで部屋に隠している小型テレビで、ひいきにしている関西系お笑いコンビがやっている番組を見ながら、わたしはノートに涎を垂らして宿題もやらずに眠ってしまった。すると、

—ガチッ、ガチリッ。ガガッ。ガチリッ。ゴソッ。

という土を掘るような音が、庭の隅っこから響いてきた。むっくりと起きてカーテンの隙間から覗いてみると、闇の中で誰かが庭で穴掘りをしているらしいのだ。石のまじった黒土が盛り上がり、暗い葉影が紫色にゆれ動き、水銀灯に照らされた怪しい人影が塀に大きく映っている。わたしはどきどきしながら、カーテンを少し開いた。

もともとわたしの成績にはあまり両親とも期待していないみたいで、来年はＣ高校にでも入ればいいぐらいにしか思っていないので、勉強にはあまり身が入らない。なにしろ小学校に入学したときのＩＱテストが「物凄く」低かったそうで、両親はその結果を知ると青ざめ、むしろわたしを遠回しにいたわるような態勢になったほどだ。ほんとうは積木の向う側に幾つあるかというようなうら悲しい問題が面倒くさくなり「あなたの好きなだけ　」と鉛筆で書いたので、そんな大ごとになってしまったのだけれど。

わたしは一応、ツアーコンダクターに憧れていて、将来そうなれたらなァとは思っているけれど、正直にいうとわたしみたいな怠け者には難しいとも思っている。でもまあ、そんなことはどうでもいい。

—ガチッ、ガチリッ。ガガッ。ガチリッ。ゴソッ。

カーテンの隙間をそっと覗いたのは、二時を少しをまわった頃だろうか。

紫色の植え込みの中で、月に照らされて人影が立体的に浮かびあがり、それがどうやらパパのものらしいことがわかった。

（何やってんのかしら、こんな時間）

パパは半分ほど穴の中に埋もれ、手の甲で額の汗を拭いながら、少し休むと再びスコップで、ガチリ、ガサッガサッ、ガチリッを繰り返した。

わたしは少しパパの精神状態が心配だったし、何よりも勉強をやっているふりをするより面白そうだったので、野外コンサートのとき持っていったペンライトを探し出し、階段を降りた。二階のベランダから声をかけてもよかったのだけれど、どうもあれはこっそりと秘密裡に事を運んでいるような感じがするので、現場を押えるためにもすぐ近くまで行くことにした。足をしのばせ、階段や台所で音を立てないようにして、パパの背後の柳の枝が垂れているあたりから様子を伺った。

一メートルくらいの暗い穴の中から、スコップでどんどん土が掻き出され、周りに盛り上げられている。紫色の葉っぱが手の平のように開いて、影を落としてゆれている。「何してんの、パパ」

すると、ぎょっとしたように顔をあげ、それから眉間に皺を寄せた。

「な、なんだ美穂か。やっぱり音が響いたか」

わたしの足元にパパの頭が見える。

「汗びっしょりじゃん」

「……な、なんでもないんだ」

わたしは肩を聳やかした。

「少し休むか」とパパはいって、中でしゃがんだ。

わたしは穴の近くまで進んでいって、中を覗いた。いつから掘っているのか、結構中は大きくなっている。黒ぐろと口を開けた穴の片側に月の光があたっていて、青銅色に染まっている。そこにからだ半分入ったパパが立っていて、その様はなんだか外人の俳優が扮した満月の下の狼男みたいな感じがする。もっとも今日は満月じゃなくて、猫の目くらいの形の月が、グレープフルーツジュースの色あいをして、透明な光を庭に降り注いでるのだった。ひっそりとしていて、どこから漂ってくるのか湿った桜の匂いと、ふかぶかとした黒土の匂いがしている。

「ゴミの穴掘るんだったら、何も夜じゃなくていいじゃない。パパもう、会社辞めたんだしさ」
　最近ちょっぴりいじけているパパに、皮肉を言ってやった。
「いや、その。つまりだね」
「お茶でも入れてあげようか」わたしは返事をまたずにキッチンの方へ飛んでいった。　ママが起きてこないように電気をつけず、暗いキッチンでヤカンに水をいれ、お湯が沸くのを待っていた。パパの目には、ちょっと秘密めいた匂いがあったので内緒にしてやることにする。それにしても深夜、水が金属の器に落ちる音って、とても孤独だ。足も冷たいし、その冷たさがだんだん骨の方にしみてくるのだった。玄米茶を入れ、湯飲みをふたつ用意した。
「こんな時間、お向いの川田さんが文句いうわよ」
「そ、そうなんだが」パパはどもった。「これは、ゴミの穴じゃないんだ」
　風が吹き、一本だけある柳の木がさらさらとゆれた。
「美穂、ママやお婆ちゃんには、内緒にしてくれるか？」
「ＯＫ」
「ところで、お前毎日、新聞読んでいるかな？」
「全然」
「そうか。じゃあニュースは？」
「パパ、ちゃんとじらさないで話して」
　コホンと咳をして、パパは夜空を見上げた。何か考えをまとめているときにする表情だ。
「パパはね、今の世界情勢を見ていて、考えたんだ。これはもう、き、危険水域に入っていると」
　何もこんなことを言うのに、立ち上がることはないと思う。でもパパは小声をふるわせ、頭の悪い中学生を相手に演説を始めた。わたしは穴の上でおしっこをするような恰好で、頬杖をついて聞いてやる。
「……いままでも、仕事で世の中のことをいろいろ考えたりしたこともあった。でね、それはずいぶん、近視眼的な見方だったと思うんだ。でもね、会社を辞めてからもっと広い視野で、政治や経済や歴史の本をまとめて読み出してみたんだ。たとえば、日本とアメリカの関係とか、北朝鮮問題とか、どうしてラブラドルリトリバーが流行っているんだろうとか、中国の今後についてとか、最近の子供はなぜ髪の毛を赤く染めるのだろうかとか、いろいろ考えを巡らしたんだよ」
「ふうん。あっ、虫が目に入った」
　パパはどれどれといって、わたしのまぶたを指でめくった。指についた土が入りそうだ。でも、わたしのことも忘れないでいてくれたので、一応安心した。
　それにしても夜中に穴なんか掘りながら、何を言い出すのだろう。
「……隣の国のあの妙な親子、金日成と金正日のこと。すべての火種となる中東問題。こんなこと、勤めているときはほとんど考えたことなかったんだ。パパの仕事は、結構世の中とかかわっているようで、日々の作業に没頭してるし、時代がそうなりゃそうなったで仕方ないだろう、みんながやるようにやるという、消極的な考えだったんだ」
「何がいいたいの、パパ」目をこすりながらわたしはいった。
「パパはね、もう、不安で不安で、しょうがなくなったのだよ。世界のお金のまわり方がこれ以上悪くなったら、きまって戦争を起こそうとする悪い奴らが出てくるだろう。いや、もっと身近な問題として、あの金日成、金正日親子は何を考えているかわからないじゃないか。あそこまで核査察で追い詰められたら、金日成はいよいよ、日本に喧嘩をふっかけていくるに違いないよ。いやこれはパパが、断言する。そうなったら、核爆弾が東京に飛んでくるんだ。ね、もうテレビでお笑い番組を見ている場合じゃないのだよ。パパの、失業のことなんかよりも、もっとのっぴきならない問題があるんだ。最近、ろくに眠れない始末なんだ」といって本当に眠そうに目をこすっている。「それに、日本政府の応対なんて、いつだってニヤニヤ、ペコペコ、情けない限りじゃないか」
「パパの政治の話って、凄く似合わないよ。仕事がなくなってから暇になったんで、心配しなくてもいいような余計なこと、心配してるだけなんじゃないの」
「そ、そんなことないよ。じゃあ、金日成なんてこの世にいないというのかい。パパの失業だけが現実だというのかい、美穂は。でも金日成だって、現実なんだ。のっぴきならない問題なんだ。パパは思うんだよ、どうして世間の奴はこの問題を大声で論じないで、会社の帰りに焼鳥なんか食っていられるのだろうってね。会社人間であり過ぎる奴には、世界が見えないんだ」

「そうかも知れないけどさ」ペロリとわたしは心の中で舌を出した。パパこそ典型的な会社人間だったのだ。
「しかも、（とパパは声を潜めた）追撃ミサイルパトリオットは、湾岸戦争のときも、的中率はお話しにならないレベルだったというじゃないか。もはや国の防衛力なんて当てにならないことは明らかになってしまった。……こうなってしまった以上は、家族単位で身を守るしか方法がないんだ。ということはだ、全国のすべての父親は、すぐさま仕事をやめて、家族を守るために知恵を絞り、行動を起こすべきなんだ。そうじゃないと取り返しのつかないことになるのだよ」
　わたしは「ほんとかあ」とか思いながら、土いじりをしていた。ちょっと寒い。
「マスコミはね、何ひとつわかっちゃいないんだ。……実はこないだ、パパは防衛庁に、直接電話をかけてみた。すると広報官みたいな男が出てきて、ノドン１号は東京まで届きませんとか、向こうだってあなた、馬鹿じゃないからそうそう簡単には仕掛けてきませんよとかいっていた。しかも、ここがどうも不審なとこなんだが……わざとしたように落ち着いた答え方なんだな。しかも、後ろに誰か別の人物がいるらしくて、いちいちその人物と相談しながらパパの質問に答えている様子なんだ。……どうやら、政府側は国民には真実を教えないという方針を取っているらしい。事実パパの調べた情報によると、自衛隊は内部の意見も分裂し、戦々恐々といった有り様なのだ。防衛のプロが、金日成のミサイルに脅えているのだよ。日本の軍備なんて、所詮アメリカに役に立たない兵器を押し売りされているだけだからね。しかし、真実を知らしめて国民の間にパニックを起こさないように、情報管理しているだけなのだ」
　スコップを握り締めているパパの手が、微かに震えている。
　父親の顔がだんだん怖くなってきた。本当に月の下の狼男のように変貌していくように見える。

東京の空が、一瞬にしてきのこ雲の下に

「こののっぴきならない非常時に、もはや一刻の猶予も許されないときに、パパは一家を守る父親として、家長として、お前たちに何をしてやれるのだろうって、そう考えたんだ」
　黒々とした穴がどこまでも続く洞窟の入り口のようにぽっかりと開いていた。
「いつから」とわたしの声はかすれていた。「いつからそんなこと、考えるようになったの、パパ」
　そういえば、失業してからぼんやりと縁側に寝っころがり、まばたきもせず空ばかり見ていたことがあった。何か声をかけると「うるさい」と追い払われたことがある。あのころからパパの頭には、そんな奇妙なタバコの煙みたいな不安が育っていったのだろうか。
「家長としての責任を果すということは、大変なことなのだ」
　パパはスコップをざくりと地面に差し込んだ。『家長』なんて言葉、パパは失業してから初めて使いだしたのだ。
「……パパの子供の頃、まだ田舎には、防空壕がいっぱい残っていたんだ。夏草に被われ、ほとんどは半ば埋まってしまっていたんだが。でも、じっさいに中に入って遊んだこともあるよ。ひんやりとして、何だかなつかしい、土に慰められるようなとてもいい感じなんだ。ね、もしも今後、日本と北朝鮮が戦争を始めたとしても、幸い家には、庭がある。ほんのちっぽけな猫の額ほどのものだけどね。でも、家族四人が身を隠すぐらいの防空壕は、作ることができるんだよ」
　パパは牧師様のように声をふるわせ、手を上げ、熱っぽく語った。
「パパ、だいじょうぶ？」
「なにが」
「……パパはいままで、ずいぶん忙しそうに一生懸命働いてきたんだしさ、休めるとき、休めばいいじゃん。真夜中に、大きな穴なんて掘らないで。あたし、贅沢いわないもん」　桜の匂いがつーんとしてきた。わたしは膝を抱えてしゃがんでいる自分のことを、いじらしくてかわいい娘だと思えてきた。月がまた灰色の雲から現れて、パパの横顔を緑色に照らした。パパの目に、大粒の涙がふくらんだ。空をじっと見上げている。
「東京の空が一瞬にして、きのこ雲の下に。……もはや、のっぴきならない状態なんだ」
　パパは不意にハッとした顔でスコップを握り、それをしばらく見詰めると、意を決したように物凄い勢いで四、五回土を掻き出して放りあげた。
「美穂。変だと思っているのだろう。しかし先を読んでいる者は、多少極端に、エキセントリックに見えるものだよ。たしかにパパは、会社でもドンキホーテだの、狼少年だのといわれてきた。会社の在り方にたいして、いつも問題提議をしてきたからね。パパとしては随分、あの会社のためには貢献してきたつもりなんだけどね。しかしいまの世の中は、パパがかつて予想した通りに動いているのだよ。それは恐ろしいほどなんだ。それに頭が猛烈に冴えてきてて、何だか水晶みたいに、一か所に意識が集まってくるんだ。……なぜそんな顔しているんだ、美穂」
「あたし、パパがなんだか、前と別の人みたいな感じがするの。会社辞めたのは別に悲しくないの」
　パパは憮然として、スコップを斜面に刺した。
「なあに、沈んでゆく船から、賢いネズミが一匹、逃げ出したということに過ぎない。それに美穂。パパはクビになったのではなくて、自分で辞表を提出したのだよ」
　月のひかりがパパの額の汗に、青白くにじんでいた。小さな庭にはまだ褐色の芝生に被われた築山があり、パパが掘っているのはその麓のところなのだ。柳の葉が垂れて月の光を透かしている。わたしは涙をふいて、笑おうとした。仕事がなくなって肩を落として猫を撫でているだけだったパパが、とにかく『穴掘り』というお仕事をみつけたのだから、娘としては応援してあげなければならない。
「どのくらいの深さになったの」わたしは覗き込む。「入っていい？」
　パパはわたしの両脇を抱いて、穴の底に降ろした。足が沈む。けっこう、深い。黒土の感触を確かめるため、ぽんぽんと二三度跳ねてみた。パパがほほ笑む。地上の感触と違って、ひんやりとして気持ちいい。月が寒そうに、青くほっぺたを染めている。ちょうどわたしの目の高さぐらいのあたりが、地面になっている。
　パパとわたしは穴の底に並んで座り、膝を抱えて長い溜息をついた。わたしは悲しくなり、黙り込んだまま土をいじった。
「目が、覚めたようだよ。大東亜生命があれほど大きくなったのはパパと同期の連中の力が大きいと思うけれど、しょ

せん消しゴムみたいな消耗品さ。しかしつまらない仕事に夢中になっている間に、日本は取り返しのつかないところまで来てしまった」
「パパ、やめて！」
「どうして」
「なんだか、怖いよ。そういうパパ」
「いまにわかるさ。恐ろしいほどパパの見通しは当たるんだ。最近は、頭が水晶だからね」
　黒土と植物の匂いが混じりあったなつかしい匂いがして、わたしはいつまでもこうして穴の底から月を見上げていたいと思った。パパの挫折感そのもののようにぽっかりと開いた黒い穴。トイレで誰かの細い影が動いて物音がした。たぶん、お婆ちゃんだ。ひょっとしたら、盗み聞きされたかも知れない。

毒舌婆さん

「最近うちは、そんなにたくさんゴミが出るようになったのかい」
　と朝食のとき、お婆ちゃんがいった。
　ダイニングキッチンのすぐ手前のサルスベリの枝に、きれいな緑色の鳥がとまって鳴いている。鶯ではなく何かの野鳥のようだ。その影が淡いまだらになって、よく磨かれた床の上に落ちている。
「でもそれにしちゃ、庭の一等地に、あんな大きなものをよく掘ったもんだねえ」
　このキッチンには、ガラスの明かり採りが大きくしつらえてあるので、すっきりとした澄んだ朝の光が差し込んでくる。床にはテーブルの脚の影が平行に幾つか斜めに延びている。お婆ちゃんが細い手で、金色ににじむマーガリンをパンに塗り、そして大きくかじりついた。もう全部入れ歯だけれど、昔から朝はパンとコーヒー党なのだ。おいしいパンの匂いを嗅ぎ、それを口にするときは、誰もが幸福になるものだ。でもお婆ちゃんは、その日に限ってしかめっ面をしていた。
「それに、何もいまどき、ゴミの穴を作る必要もないじゃないか。ちゃんと青いトラックが来て運んでくれるじゃないの。だいいち、そんなゴミ溜め作られた日には、庭が臭くなってしょうがないよ」
　いつのまにか庭の風景に異変があることに気づいたらしい。わたしも古い板を置いたりして、わからないようにカモフラージュしたけれど、やはりお婆ちゃんの目はごまかせない。こんなときお婆ちゃんはミス･マープル気取りだ。ちくちくとこまかく追究してくる。あるいは庭での会話も聞かれたかも知れない。わたしはパパに助け舟も出せず、知らん顔をしていた。頭が痒いのか、グレイがしきりにわたしの脚にからだを押し付けてくる。さっきの緑色の野鳥が羽根を動かし、枝を大きくゆらしている。床には明るい水色の影が差し、温かくなりそうな空気だった。
　お婆ちゃんは、入れ歯でがちりとトーストに食いつき、さらに目を光らせ、
「大方、咲子さんの差し金で、あたしのことをそこに埋めようって、魂胆なんだろう」といってにやりと笑った。
「お母さん、何てこというんですか。咲子がいないからいいようなものの」
　パパはコーヒーを飲むのをやめ、姿勢を正し、お婆ちゃんの顔を覗きこむようにしていった。咲子さんとは、ママのことだ。
「ジョークだよ、ジョーク。わが子ながら、冗談のわかんない子だねえ。育て方が間違ったのかしら。もっとも爺さんが、まったく同じタイプだった。役所づとめで杓子定規。話してても退屈なんだわ、これが。……美穂、砂糖よこして」
　わたしは上目使いで召し使いのように銀の蓋のついた壜を持っていった。食事どきはお婆ちゃんが絶対的な支配者なのだ。
「近所じゃ変な噂が立ってるよ。こないだスーパーの『ダイエー』に行ったら、川田さんと高木さんの奥さんがひそひそ話しててね。ほら、あすこのちょうど、桃だのパイナップルだのの缶詰の商品棚のところ、こちら側にあたしがいるのに気づいてなかったんだ」　お婆ちゃんはぎろりと目を光らせると、話の呼吸を整え、軽い手つきでついついとマーガリンを塗っていった。
「ふたり、何話してたと思う？　……望月さんの旦那様はバブルで首を切られたあげく、頭がおかしくなって、髪をボサボサにして庭に大きな穴を掘り出したらしいわよ、と、こうだよ。（お婆ちゃんはからだをよじらせ、いやらしく物まねをしてシナをつくるようにしてみせた）チッ。すぐ広まるもんだよ、こういう他人の不幸ってやつは。連中、ご主人が大手商事会社と家電のエライさんだから、人ごとだって顔してねえ。ふん、二言目には、我が家のデュッセルドルフ時代は、とか、シンガポールのコンドミニアムに住んでいたころは、とか喋りたがるんだからね、あのふたりは。そんなに東京が住みにくけりゃ、とっとと帰えりゃいいんだ外国に。……直樹、家族に恥をかかせているんだよ、あんた。去年の秋だか、奴らが庭でバーベキューをやっててさ、煙があたしの二階の部屋に入り込んできたんで、きっちり文句つけてやったら、それ以来恨みに思ってるのさ。……それで何とか噂をでっちあげてうちを貶めようとしていた矢先に、つごうよくお前がクビになったんだ」
「クビではありません」
　叱られた男の子の顔つきで、パパは抗議した。
「あたしはそのことをいってるんじゃないよ。お前のその後の身の処し方だよ、問題は。まだ四十代だろ。父さんの昔

のコネだって使えないことはないし、いろいろ手はあるはずなんだ。ところがお前ときたら、何だかもう人生から降りたような顔して、前向きな姿勢がパッタリ消えてしまったじゃないか」
「そんなことはありません。考え方が変わったんです。それに、朝からそういう話、やめてください。美穂が聞いてます」
「あら、いうじゃないか」
　ぱりり、と素晴らしく香ばしい音を立てて、お婆ちゃんはトーストを噛んだ。「なあに、美穂だってこういう話から大人になっていくのさ。そうそう、こないだ貸してやったクリスティの小説は読んだかい？」
「途中まで。あんまし面白くない」
「なんだい、トリックが頭に入らないんだろう。まったく望月家は、代を重ねるごとにオツムが退化していくようだねえ」
　大袈裟にふかい溜息までついてみせた。
　わたしは首筋をぽりぽり掻きながら、
「うるさいババア、だなあ」といって、スプーンをパチリと置いた。
　するとお婆ちゃんは両手を打って喜び、上機嫌でコーヒーを飲み干した。どういうわけか、わたしがそんなふうに悪態をついたりすると、お婆ちゃんは大喜びなのだ。
「お前はあたしに似ているよ。まるで小型のあたしだよ」といってクックッと笑った。　それから上機嫌で老眼鏡を鼻にのせると、どれどれとでもいうように顎を突き出し、新聞を両手で広げた。パパはそれを横目で見、うらめしそうな顔をして、スプーンで取り寄せたポテトサラダのひとかたまりをじっと見ている。わたしは無意味にコーヒーの中でスプーンをかちかちゃと鳴らしていた。
「……ではお母さんは、金日成も金正日も核兵器も、この世に存在しないとでもいうのですか」
　わたしはびくんと顔を上げ、ごくりとミルク入りコーヒーを飲み下した。
「なんだいそれは」
　老眼鏡を取った。緊張が走った。何かキッチンの天井からとんでもなく異様な生き物が、いきなり平和な春の朝に飛び出してきたような気がした。グレイが銀色のボールの中のミルクを、慎妙そうな顔でなめていて、そのぴちゃぴちゃいう音だけがキッチンに響いている。パパの目が、じりじりと真ん中に寄ってきた。
「そういう政治の難しい話は、あたしにはわからないよ」
　鳥が枝を大きくたわませ、青い空に飛び立っていった。

「美穂、美穂、こっちおいで」
　キッチンから出ると、お婆ちゃんがリビングで、グレイの喉をあやしながらわたしを呼んだ。
「……あたしのいったこと、怒るんじゃないよ。パパはねえ、あれ、自信なくしてるんだよ。昔から意気消沈すると、ああいう意味のない単純作業をやらかすんだ。穴掘りみたいなね。あの子は昔、先生に叱られたとき、雨の校庭で、長い長い蛇みたいな変な物を作りあげたんだ。何十メートルもある蛇行した泥の塊をね。大学の試験に落ちたときも、粘土いじりしてようやく立ち直ったんだ。すぐ神経症になるんだ。なに、ふたりで隠し事したって、だめさ。この小うるさい婆あは、何でもお見通しだろう？」
「パパ、だいじょうぶかなあ」とわたしはぽりぽりと首をかいた。ときどき、急にからだがかゆくなることがある。
「何でもないさ。直樹も、仕事熱心だったからねえ。心の支えってものが、なくなっちゃったのだろうよ。パパが失業したからって、何もお前まで気にしなくていいんだよ。勉強は、しっかりやって貰うから。なに、お婆ちゃんだって、ちょっとは蓄えがあるんだから、あんたが大学行くぐらいのことは、助けてやれないこともないさ。せいぜい今のうちあたしに、媚び売っとくことだね」
　グルル、と気持ちよさそうにグレイが鳴いた。ベランダに置き去りになったままのバケツに溜まった雨水がきれいに澄み切って、その反射光がリビングの黄色いカーテンに淡い波紋をゆらしている。その光の戯れは、楽しげな音楽のようだ。
　お婆ちゃんは中腰になり、少し開いている隣の部屋を覗いて、
「それにしても咲子さんは、もう少しきちんと掃除して、遊びに行ってほしいもんだねえ。まったくこの部屋、ちっとも片付けてないじゃないか」

「明日帰ってくるよ、ママ」
「亭主放り出して、友達と温泉旅行かい。まったく、いいご身分だねえ」
　そういって小さな箒を廊下の壁から外し、せかせかと掃き出そうとした途端、お婆ちゃんは急にしゃがみ込み、胸を掻き毟るようにした。
「だいじょうぶ？」
　わたしがパパを呼びにいこうとすると、かすれるような声で「呼ばなくていいよ」といってＴシャツにしがみつかれた。額から汗を滲ませ、しばらくの間ひどい息をしていた。わたしは両手で背中をさすってあげた。
「ああ、何でもない。ちょっとね。……ただ、中古の、心臓が、その、ストライキしてるのさ」
　キッチンを覗くと、パパはもういなくなっていた。朝の陽光を受けてテーブルの上の銀食器が輝いていた。並んで立っている幾つものグラスがプリズムとなって、温かくなりつつある壁の表面に、小さな虹を浮かべていた。きっとパパは二階に上がったのか、それとも『穴』を掘りに行ったのかも知れない。

遊び好きなママ

　ママが帰ってきたのは、日曜日の四時過ぎだった。年に一度、女子大時代の同級生とあちこちの温泉巡りをしておいしいものを食べる会があるのだけれど、今年は富山の方に行ったらしい。外でタクシーが止まる音がして、紫色の水底のように染まった夕暮れの道路で、中年のおばさんたち特有のにぎやかで騒々しい挨拶が繰り返され、しばらくしてギィッと庭の扉が開いた。両手に荷物をいっぱい下げている。
「あーあ、疲れた。美穂、ナマ物だからこれ、冷蔵庫に運んで。みんな元気にしてた？　それとこれ、地酒も買ってきたって、お婆ちゃんにいってよ。お婆ちゃんのためにって、そういうんだよ、ちゃんと。ふーっ。……桜、きれいだったわよう。川底にね、お湯が湧いてて、夜の温泉に桜の花びらが浮かぶんだから。ああ、極楽だったわ。バチあたらないでしょ、年に一回くらい。来年は、北海道に行くことになってるの。あんたも、ボーイフレンドばかりじゃなくて、女の友達大切にするといいわよ。女は先が永いんだから」
　ママは玄関に荷物をならべると、あぐらをかくように廊下に座って、ふーっと一息ついて荒い呼吸を整えると、いきなり両手をあげて大の字になってしまった。
「ねえ美穂、お婆ちゃん、何かいってなかった？　いいご身分だねえ、とか」
「別に」
　まったくこの家のわたしの立場は、スパイみたいなもんだ。
　口に手を当てながらあくびをし、ママはむっくりと起き上がった。背中に自分の背中をすりつけるようにして、わたしはお土産の駅弁や和菓子の包紙を開いた。
「旦那ほっぽり出していい気なもんだ、とか。ロクに掃除もしないで出ていったとか、そのくらいは言ってるだろう、どうなの、美穂？　まったくあのヒト、いつまで元気なんだか。とっくに平均寿命はこなしてるはずだけどねえ」
「これウニ？　凄いじゃん」
「でもママはね、パパがまた妙なヘマしてないかって、心配だったのよ。何しろ家でいちばん頼りなくて何するかわからないのは、一家の主なんだもの」
　言い出そうかやめようか二秒ほど迷ったあと、わたしは決心した。
「築山の後ろ、気がつかなかった？　穴掘ってるの」
　わたしは手身近にわけを話した。男同士の約束だったら守らなければならないけど、娘のわたしはパパのことを考えた上で、破らなければならない約束だったら、いつでも破ってしまうのだ。
「穴……。　穴。会社辞めたからって、穴掘ることはないじゃないの。穴があったら入りたいというわけ？　ああ、どうしたらいいんだろう。明日から近所、歩けないじゃないの」
　突然、電話が鳴った。
　ママは荷物をよけて、腰をぽんぽんと片手で打つと、がに股をしながら電話の置いてある廊下の隅へと足を引きずっていった。
「……だめよう、今、帰ってきたばかりなんだから。疲れちゃってもう。……あらやだ、そういうわけじゃないの。あたしなんか、あなたにくらべりゃ、音痴もいいとこ。なあによう、あなたの方こそマイク持ったら離さないって、みなさんの噂よ。振付までちゃんとしてるって。こないだの西田佐知子、最高だったわあ。ねえ、そういえば、あの時の大学生、その後どうしたの？　テニス部の、ちょっとかわいい。エエっ。嘘でしょう。ホントなの、それ。ねえねえ聞かせて、その話。……だめよ、これから夕飯の支度しなきゃならないし。怒られちゃうわよ姑に。……そぅお。じゃあ、さきに盛り上がっててよ。何か理由つけて顔出すから。もう、悪い人ねえ」
　ママはパパの心の悩みなんか、てんで問題にしていない。わたしはそれが不満でグレイの耳を強くひっぱってやった。

――パパはだんだんお人よしの表情がなくなって、何だか哲学者のような顔になってきた。あまりお風呂にも入らなくなり、入っても髪の毛を洗わないのか、ぼさぼさのままだ。髭だってしばらく剃っていないみたいで、ついこのあいだまでは「自由業ふう」だったのに、いまではそれを通り越し、何だか犯罪者、政治犯みたいに見える。しゃべると目がだんだん真ん中に寄ってきて、別の人みたいな顔になる。

昼間は新しく作った書斎で本の山に囲まれているか、三十分おきぐらいの間隔で、そわそわと思い出したように『穴』を覗きに行き、変化がないと安心したような顔で戻ってくる。廊下でわたしと擦れ違っても、視線が宙をさまよい気がつかないときがある。

『穴』は、日中は厚いビニールシートに覆われ、その上に山のような廃材が載せられて、その様は何だか動物の巣穴を思わせた。シートには雨水がたまり、葉っぱや季節の花が浮いて、鈍いひかりを放っている。日がたつにつれ、『穴』の縁はだんだん大きくなり、うず高く盛り上がり立派になっていった。初めはただのゴミの穴みたいだったのに、いまではちょっとした古墳のように見える。スコップを持って、パパは坑夫のようにしょっちゅう籠っているので、内部も相当掘り進められているようだった。

葉桜が過ぎ、庭の緑が濃くなって、白や青のいろんな花が次々と葉の間で咲き始めるようになった。黄色い蝶々が現れ、きらきらと光る虹色の翅をした羽虫が飛び交い、植物の匂いがむっとするほど垣根や花壇に満ちていった。そしていつのまにか蝉が鳴きだす季節になった。

純白の弾力を持つとても見事な雲が、初夏の菫色の空に浮き、くっきりとした枝の影がシートの上に青い模様を投げかけている。

「これはね、ひとつの、ぎ、儀式なんだよ」と痩せて血走った目をしたパパは、スコップで土を崩しながら、低い声でいう。「パパの人生にとっての、重要な、儀式なんだ」

儀式とは、どういう意味だろう。

最近はお婆ちゃんやママが食事中に話しかけても、放心状態で答えないことすらあった。わたしが『偵察』にやられて二階のパパの書斎を覗いてみると、雑然と本の積まれた部屋の奥で布団を頭から被って、闇の中で夜行性動物のようにふたつの目を光らせている。もともとパパには何となく、ダンディな黒熊といった印象があったけれど、いまでは手負いの野犬みたいな感じである。

この間もお婆ちゃんが再就職のことを持ち出したら、パパは激して「お母さん、そういう狭い価値観を押し付けるのは、やめてください。だいたいあなたには、何も分かってないんだ」と怒鳴った。以前は、マザコン気味のパパがこんな口答えをすることはほとんどなかったので、お婆ちゃんもこのときばかりはひどくショックを受けたらしい。

――ひとつは暑さのせいだとも思う。まだ初夏なのに今年の暑さは猛烈で、午前中から三十度を軽く越してしまうし、夜は夜で窓でも開けてないと眠れないほどだった。

日中はまるで太陽がふたつ昇っているようだったし、家々の屋根は濡れたように眩しく輝き、じっとしていると汗がふつふつと脇の下に滲んでくる。強い直射日光に、棕櫚の樹もぐったりと長い葉をうなだれている。庭中の植物が茹でられたようになっている。

そしてそんな暑さの中で、パパはしだいに暗い目をした別の人になっていくみたいだった。

「美穂、ここまで来てしまったからには、パパにだって、相当な考えがあるんだ」

と、スコップを布でぴかぴかに磨き上げながらパパはいった。それはまるで時代劇のお侍が、大切にしている刀を手入れしているような満足げな表情だった。

「これはひとつの、闘いなんだね」とパパは声を潜めるようにいった。

「われわれはいままでは、何も知らされていなかった。でもそれは、仕組まれたことに違いないんだ。そりゃあそうだろう。会社と飲屋と家庭の往復じゃ、人間も世の中も、深いことは何もわからないよ。世界はどんどん恐ろしい方向に進んでいるし、その終わりも近い」

パパは暗く、にやりと笑った。パパの調べ上げたところによると、大東亜生命の会長は大変な悪人であり、辞めた後もパパやわたしたち家族の不幸を望んでいるというのだ。　しかもそれは計画的な全社的陰謀だというのである。ここまで来ると、パパは完全に頭がおかしくなっていると、わたしも思う。

「まったく日本のサラリーマンは、何も知らされていないといっていいくらいだ。われわれは、養鶏場のニワトリ以下の存在さ。この間、あるカナダ人の心理学者の本を読んだのだがね、美穂。（パパは声を潜めた）どうやら、電話やテレビやワープロの中にまで、人間の思考を一定の方向に押え込む、弱い電磁波を流す装置が埋め込まれているらしいんだね。サブリミナルレベルの思考統制装置だ。これは、企業が社員を管理するために使用されるときもある。実は大東亜生命にいたときパパの使っていた富士通のパソコンにも、これが仕掛けてあったらしいんだよ。社員の意識下の統制を行うために、あの会長の張り巡らした最新兵器を使った策謀というわけさ」

「ほんとうに、そんな機械見たの、パパ」

　わたしは恐る恐る尋ねた。するとわたしの目を覗き込み、
「いやそんなことはね、常識的には考えられないというのが、普通の感想だろうよ。パパもまさか、そこまでのことはないだろうと、たかをくくっていたのだよ。しかし最近それがどうやら、本当らしいことがわかったんだ。……食事を二日間ほど取らないで、感覚が敏感になったとき、家のテレビや電話を触ってごらん。もう、すぐにわかるから。物が考えられなくなるんだ。脳髄が、こう、痲れるようになってね。それを知った瞬間、とうとうここまでやりやがったか、とパパは思ったね。もう、全身に水を浴びたように思ったよ。会長は、元社員の家にまで、思考統制装置や盗聴器を仕掛けているらしいんだ。それだけじゃない。いまや多くの企業が、政府と結びついて同じことをやり始まっているんだ。……しかし大新聞は、この事実を報道しないんだね。それは、タブーだからさ。すべてが仕組まれていたんだ。だから現代の日本人は、本当に自分の意志で生活するということが、できなくなってしまったのだよ」
「たまには」とわたしはいった。
「たまには、遊園地やサイクリングや、水泳に行こうよ。そうだ、明日プールに連れて行ってよ」
　こういう神経の病気には、明るい光のある世界に連れ出すことが、肝心なのだ。
「……いや、夏の間は、監視が厳しい。実は会長の差し金で、パパの監視役として、同期入社の間宮が、路地のタバコ屋の奥のアパートに潜んでいるんだ。なあに、毎朝、こちらの方から挨拶してやっているよ、ハッハ」
　パパはおもむろにタバコを出して火をつけると、顔をしかめ、
「実はパパはね、同志を募って、全国組織にする計画を立てているんだ。純粋であるがゆえに失業してしまった連中を、集めるんだ。もうそのための文面も、出来ている」
　わたしはしだいに、パパが遠い危ない世界に行ってしまうような気持ちになった。
「世の中はどんどん悪くなっていく。本当に自由に生きるためには、そして愛する家族を守るためには、いまやパパのように自家製の地下空間を持つことしか方法がないんだ。もうこの、いつわりばかりの地上では生きられないのだから。……ところで、まさかお前は、美穂。ときどき『穴』のまわりをうろついているけど、連中のスパイじゃないだろうねえ」
　わたしはそういわれた瞬間口がきけず、訳のわからない感情に襲われてしまい、みるみる涙が溢れてしまった。するとパパはわたしの頭を抱き締め、
「悪かった悪かった。しかしここまで来てしまった以上は、これくらいの注意が必要なんだ」とつぶやいた。

　パパの書斎、といってもそれは二階の六畳の薄暗い部屋で、しばらく物置みたいに放っておいたのを会社を辞めてからパパが改造したのだけれど、その中に足を踏みいれてみると、お酒とタバコと汗の混じったむっとするような匂いに、思わず顔をしかめてしまう。特にお酒の壜はウイスキー、ラム、日本酒、ワインと、空になったものやら、半分入ったものやら、茶色、緑、黒、紫とさまざまなものが事典や写真集の間に並び、しゃらしゃらとゆれる不思議な液体を鈍く光らせているのだった。
　本棚には、それまでに並んでいた実用書とはまったく違った種類の本が、大量に押し込められている。わたしは本を読むのは嫌いだけれど、暇つぶしに著者の名前を棒読みしするのは好きだ。口の中でガムを噛んでいるような気持ちになるから。
「アウグスチヌスプロティノスイエイツナーガルジュナヒポクラテスリッケルトベルジャーエフコンラトロレンツショーペンハウエル、アブドルアルハザードヘルメストリスメギストスエーリヒツァンシャンカラメルキジデク」
　といった具合で、こんなの全部読んでたら馬鹿になるに決まっている。でも、いかにも難しそうな表紙をいじったり、古い紙の匂いを嗅いだりするのは好きだ。
　本棚には、最近のアメリカやフランスの小説まで並んでいる。物語なら少しは読めるかもしれない。
「ヘミングウェイ『日はまた昇る』、これ知ってる。髭のある人でしょ」
　わたしは背伸びをして、本棚の本を取ろうとした。
「映画になったからねえ」とパパは、いつになく穏やかな顔で答える。
「『千夜一夜物語』、シンドバットでしょ、これ。『ドイツ怪談話』、怖わそう。ティナ･オブライエン『ニュークリアエイジ』お掃除の本？。パウル･クレー『造形思考』、図書館みたい」
「実はパパは本のタイトルの尻取りをして読んでいるんだ。例えばね、『不可知の雲』という本のあとはモだから、『モデラート･カンタービレ』という小説に行って、次に『レオナルド･ダビンチの発想』と進む。次はウを受けて『宇宙の起源と天体の秘密』、そして『ツタンカーメンの謎』とくる。さらに『ゾロアスター教、その思想と儀式』、とこうなる。これだと予想外の読書になって、いかにも他の人が気づかないようなことが発見できそうじゃないか。……この年になって学生みたいに読書するには、そのくらいの工夫がいると思ってね」パパは少し得意げで、わたしと本の話ができるのが嬉しく仕方ないらしかった。机の引き出しから『読書ノート』と下手なタイトルを書いた分厚い埃だらけのノートを取り出した。そこには『読書シリトリ表』というのが書いてあり、万年筆で書き込まれたインクの滲んだ細かい字が見える。失業してから読んだ本のタイトルがたくさんの小さな矢印でつながり、すべて尻取りゲームになっていて、まるで黒蟻が紙の表面を行列を作って這っているように見える。でも、「ン」のときはどうするのだろう。パパはいつのまにか、奇妙な勉強家になってしまった。それらの哲学、思想、宗教、文学といった本の他にも、別枠で夥しい北朝鮮関係の本と軍事関係の本がぎっしりと詰まっている。
「まさにね、晴耕雨読だよ」
　上機嫌になったパパは、不意に握っているボールペンをいらだたしげにパチパチと机に打ちつける。
「実際、バブルがはじけて失業して、良かったと思っているよ、負け惜しみじゃなくて。うん、ありがたくルンペンにさせていただいたってもんさ！　もう一度、人生を見詰め直す機会ができたのだからね。ずいぶんいろんなことを犠牲にして生きてきたものさ。人生に対する疑問とか、心や魂や死とか、そんな重要なことについて、四十何年間、強いて知らないふりを決め込んできたんだ。日本のサラリーマンはみんなそうなんだ。そしてある日とうとつにガンを宣告され、脳卒中で倒れる。これが大方の人生だ。……実際『穴』を掘り続けることによって、いろんなことが分かってきたよ。スコップの向こうに、いろんな映像が見えてくるんだ。ビデオみたいにね。連中からお前たちを守るためには、戦略が必要なのさ。こうなりゃゲリラ戦だ」
　わたしは目を伏せ、うなずいてあげるしかない。
　この数か月でパパは外見も性格も随分変わってしまった。でもそれは本来パパの心の奥底にあった別の心が、失業という事件をきっかけとして、あるいはもてあましていた大量の暇を栄養素として、恐ろしい勢いでむくむくと成長してしまったのだと思う。たぶんパパはこれまで、会社でも家でも我慢の塊だったのだ。
　事態がしだいに深刻になるにしたがって―― つまりパパの穴掘りという行為が後戻りできないほど本気になってくる

にしたがって、最初パパの気まぐれを笑い話にしていたママもお婆ちゃんも、黙り込むようになった。ときおりふたりの間で「精神病」とか「病院」とかいう言葉がひそひそ声で交わされていた。

毎日、大気がぶあつく澱んでいるようだった。

棕櫚の樹は濃い緑の尖った葉を空中でぐったりと折り曲げ、すべてがくらくらとかげろうの中で揺れているように見えた。街を歩いている人たちも、交差点でまぶしそうに手をかざしている人たちも、誰もが操り人形のように力なく、ぐったりとしていた。

ある日、ママがいらだたしげにパパにいった。

「ぶらぶらしてないで、職安でも何でも、行ったらどうなのよ」

すると隣の部屋で聞いていたお婆ちゃんが飛んできて、

「咲子さん、あんた、そこまでいうことないだろう」と両手を腰にあてた。

たちまちふたりで言い合いが始まった。わたしは悲しくなり、むっつりとしたグレイを抱いて外に出ていった。

そのうちパパは絶対に電話を取ろうとはしなくなった。盗聴されているとか、『奴ら』が嗅ぎつけたとかいって近寄らないのだ。小包が届いても、わたしたちに開けるなと命令し、「ははあん、これは会長と間宮の奴の連携プレーだな」とかいいながら、中腰になりテーブルの高さに視線を合わせ、犬が靴を嗅ぐように、何分間も警戒している。

そんなことに飽きると、ぴかぴかに磨きあげたスコップを肩に、「偵察のため」家の周囲を三十分ぐらい歩き廻る。それを隣の川田さんや高木さんが、窓の隙間から覗いているのでわたしは恥ずかしくてたまらない。外出するかと思うと、不意にくるりと踵を返し「計画変更だ」とつぶやいて、『穴』の中へと引きこもってしまう。そして二日ぐらいすると、油汗でぴかぴかになった土色の顔を、恐る恐る穴から覗かせる。

この間は、「監視の間宮の奴が、いまアパートから出ていったから、尾行してくる」といって、この暑いのに黒メガネとコートで変装して、町中に出ていくこともあった。　でもその「間宮さん」がどのアパートに潜んでいるのか、パパ以外誰もわからない。　だいたいパパと同期の間宮さんなんて、会社にいたのだろうか。

「美穂、あたしゃお前のパパが、わからないよ。あんな息子じゃなかったんだ。あの子には思春期のころも反抗期というものもなかったし、ハンサムな顔でいつもにこにこして、世の中にこんなにいい息子がいるかって、いつも自慢だったのに」

あの気丈なお婆ちゃんが、にじみ出た涙を拭う。愚痴の相手をさせて悪いと思うのか、そんなことをいった後には必ず五百円玉を一枚くれる。ママも台所仕事をしながら、わたしにどんなに自分が不幸な女かをくどくどという。そんなこんなでわたしは最近、慰め役専門なのだった。でもお婆ちゃんの方がお金をくれるだけ、少し好きだ。

書斎に閉じこもったまま、蛍光灯の下で設計図らしきものを広げ、鉛筆で印をつけ、より強靭な『穴』を作り上げるためいろいろな素材の表を作成しているパパ。くしゃくしゃに丸めた紙が、布団の上に夥しくころがっている。どうやら北朝鮮からの核攻撃に耐えるには、あの自家製シェルターの根本的な構造の見直しが必要らしかった……。

その血走った目は、まるで屋根裏部屋で死んでいく伝説的な詩人や画家のようだ。

妙な本の知識で自然食にも凝ったらしく、白米、白砂糖はうけつけなくなってしまった。それらはすべて人間にとって毒であり、政府と食品業界による『陰謀』なのだった。いつのまにか我が家は有機野菜を並べている『ナチュラルショップ村田』でしか、ニンジンもタイコンも野菜は買ってはいけないことになってしまった。いくら無農薬の自然食だからといって『ナチュラルショップ村田』は高すぎる。どれも二倍から三倍くらいの値段だ。『穴』とそんな自然志向がどういう具合に絡み合っているのか、わたしはわからない。とにかく「敵」とか「奴ら」とかいう言葉が、頻繁に痩せ細ったパパの口にのぼるようになり、パパが失業したのすら、大東亜生命の会長と間宮さんに代表される「奴ら」の仕業だといいたげであった。そしてどうやらパパの妄想では、会長の背後には驚いたことに金日成が控えているというのである——。

「信じられないことだが、冷静になって考えてみると、どうもそういうことらしいんだ」

暴力

　パパは七月頃から暴力をふるうようになった。
　そんなことは初めてだった。テーブルクロスをひっくり返し、暗い目をしてママに力いっぱいの平手打ちを食らわせた。ママはこのとき椅子で頭と腰を打って、お尻に紫色の内出血をした。もっとも口論のきっかけは、ママが家事をいいかげんにして大学生とカラオケに行ったせいなのだけれど。それに、何かパパの自尊心をひどく傷つけることもいったようだ。ママはトランクを出して実家に帰るふりをしたけれど、夜の二時半過ぎにベロベロに酔っぱらって帰ってきて寝てしまい、その日は大事にならずに済んだ。　それでもママは口惜しさから、何日もパパの顔を見ず口を利かずにいた。
　異常な夏。
　家族はだんだんパパに批判できなくなってしまい、息をひそめるようにしゃべるようになった。わたしは来年一応受験の年になっているけど、勉強など手につかず、机の上で爪を磨いたり、髪の毛をいじったり、あくびをしたり、ぽりぽりと背中や胸を掻いたりしていた。
　すでに『穴』を掘る神聖な行為はパパの公然の仕事であり、天職ですらあった。
　いまやあの『穴』は、庭先のいまわしい瘤であり、増殖する腫瘍であった。入り口にはいつの間にか鳥居のような小さな赤い門まで作られていた。客が来たら何と説明していいのかわからない。
　我が家ではすべてがひそひそ声になり、重苦しい空気になっていった。たまにパパが『穴』から出て来たときの食事はぴりぴりとして、食べ物の味がわからなくなってしまう。
「もうじき、地下に移住することができる。それまでの辛抱だ」
　物憂い病人のような顔をしたパパは、額に深い皺を刻みつけながら厳かにつぶやき、また無感動な顔でスプーンを黙々と動かし続ける。ママとお婆ちゃんはおろおろと顔を見合わせ、パパの機嫌を伺うように見る。
　柳の葉はますます濃い青にそまり、棕櫚の葉は硬く大きく尖ってきた。猛暑が続き、わたしたちは夢遊病者みたいに家中や庭をふらふらと無意味に歩き廻った。頭が左右からしめつけられ、いつも蒸気であおられているような夏だった。わたしはむやみやたらにペットボトルの水を飲み、暗い顔でおしっこばかりしていた。
　『穴』は入り口に赤いペンキの塗られた鳥居が立てられ、バケツにいっぱい詰められた土砂が、滑車でどんどん掘り出されていた。
　スーパーに買い物に行っても、お肉屋さんで向いの川田さんや高木さんのおばさんに会っても、何かわざとらしい笑顔をされる。ある時、おばさん立ちが話しているのを盗み聞きしてみると――あそこのご主人、何でもバブル時代に会社の財テクで大穴を開けて、居辛くなったらしいの。おまけにアルバイトに来ていた女の子の愛人とトラブルがあって、望月さんのお家は、もう大変な騒ぎらしいわ。こないだも、凄い喧嘩よ――。
　これが近所の噂というものなのだ。
　それにしても、愛人の話はどこから出てきたのだろう。たぶん別の家の噂と合成されてしまったのだと思う。

　ママはつねにびくびくとして、しだいにパパを避けるようになり、外で夜遊びすることも頻繁になっていった。「両親の離婚」といういままでだったらまったくの他人事が、現実的な未来として感じられるようになった。クラブ活動の部員だけが校庭を走り廻っている、ひっそりとした日曜日の学校に行って、体育館の入り口で、両親が離婚した後の自分のことをぼんやりと考え、涙ぐんだ。
　新井という名前の近所のアパートに住んでいる大学生からよくママに電話がかかってきて、カラオケに行ったりお酒を飲んだりしている。わたしは大学生のえらく楽天的で軽薄な声を憎んだ。ママは何かと「新井さん」を話題にしたがるようになり、「美穂の家庭教師にどうかしら」とまでいい出す始末だった。子供をダシにして大学生と付き合うチャンスをつくろうとするなんて、最低の母親だ。

　ある日の午後、エアコンをかけながらウチワで首のあたりを扇いでいるぐったりとしたお婆ちゃんの前で、ママがとつぜん正座をして、三つ指をついた。
「お母さま。ながいあいだお世話になりました」

　驚いたようにお婆ちゃんは、ソファからからだを起こした。
「なんのマネだい」
「こうなったらお母さん。わたし美穂を連れて、別れるわ」
「ちょっと待ちなさい。直樹のことかい。そうなんだね。ちょっと、待ちィ。あれはね、穴掘り以外に、まず、きちんとした定職を見付けてあげることだよ」
「でもあれじゃもう、社会復帰なんて、できやしないわ」吐き捨てるようにママはいった。
「あたしはあの子、失業したショックを、家族の手前、なんとか埋め合わせるため、途方もない芝居をやらかしたのかと思ったんだ。でもそんなのは、長続きしないだろうってタカをくくっていたのさ。でも、ありゃどうも、ノイローゼかね。……だからこそ、咲子さん、あんたやわたしが必要なんじゃないか」
「でもお母さん。わたしはもう耐えられません。なぜ女だけが、こんな理不尽を耐えなければならないの？　本当の幸せって、どこにあるのよ」
　お婆ちゃんは眉をつりあげ、
「ここまで……ここまでふたりでやって来たんじゃないか。……あんただって」
　するとママは、初めからその場面を待ち構えていたかのように、ヒィーッといってお婆ちゃんに抱きついた。しがみつかれたお婆ちゃんは、暑苦しいので顔をそらしながら、背中をぽんぽんと叩いていた。
　あんなに仲の悪かったお婆ちゃんとママは、これで共同戦線を張るようになった。
　その向こうの築山の暗い日陰で、スコップが光り、土の黒い塊が、ごそっ、ごそっと、飛んでいた。

穴の中には木の柱やトタン板が差し込まれ、もう大分整理されているらしかった。築山の脇にはコンクリートの袋がいくつか重ねられている。もはやパパ以外、誰も穴の内部構造を知る者はいない。小学校のとき学校の小屋で兎を飼っていたことがあったけれど、兎はひくひくときれいな桃色の鼻をひくつかせるだけで、あまり土の上には顔を出さないかったことを思い出す。パパもときどき穴の上に顔を覗かせるだけで、ロクにご飯も食べなくなってしまった。それでも一応お弁当らしきものをお盆に載せて置いておくと、いつのまにか皿は、嘗めたようにぴかぴかにきれいになって、戻されている。

——暗い穴の中で皿をなめているパパ。わたしはそのぴかぴかの皿を洗い、何だか悲しくなって少しだけ、泣く。

たくさんの汚れた綿の塊を、上空から大きな腕で圧し当てているような曇り空。こんな悲しいむしむしした午後は、氷の入った冷たいコーラがおいしい。

午後三時頃、わたしはお婆ちゃんの目を盗み、ペンライトで穴の奥を覗いてみた。ぼんやりと薄暗い空間の底に、トタンの錆びたざらざらした色や、湿った板の形が手前の方に浮かびあがった。内部には梯子が架けられ、その下には二三段のコンクリートの階段まで作られている。黴の匂いと、くすんだなつかしい土の匂いがあたりにたちこめている。生き物の死や植物の死がいっぱい堆積して、永い年月の間にふくよかに変化した匂い。穴の中は以外に広く、赤茶けた土の層のはるか奥まで、深くえぐられていた。こんなところからと思うほど、深い層から白い髭の根が突き出し、脚のいっぱい生えたくるくると丸まる茶色の虫が、根の先端を行っては戻り、行っては戻りを繰り返していた。 わたしが怖る怖る梯子を降りてゆくと、左下の半透明のビニールの覆いが膨れあがるようにぞもぞと動き、下から大きな顔がむっくりと起き上がった。きゃっと叫ぶわたしを、がっしりとした両腕が捕えた。

「怖がらなくても、いいじゃないか」とパパ。

土のついたビニールの覆いを被ったパパは、大きな哺乳類の胎児が生ぬるい水の入った袋の中でもがいているようだった。まるで子馬の出産みたいだ。壁の脇の思いがけないところについているスイッチを入れて、裸電球をつけた。あたりは斜めから照らされ、わたしたちは、色の悪い熔岩で出来た鐘乳石のような不思議な生き物に変わった。

「地上は、どうかね」とパパは暗い目をしていった。「最後に会ったのは、そう、四日前か。美穂、お前も高校など行くのをやめて、パパと一緒に地下で生活しないか」

「してもいいけど。ママやお婆ちゃんをどうするの？」

「穴掘りという行為が、こんなに深い行為とは、知らなかったよ。こうやってスコップを突き刺すだろう。するとね、昔味わった恥ずかしいことや、苦しいことが、ドンドン土といっしょに掘り返されていくような気がするんだよ。じゅくじゅくと膿や腐ったものが傷口から溢れてくるんだ。ひと掘り、ひと掘り、記憶がまざまざと甦ってくるんだね。思い出には重さも、湿り気もあるんだよ。こうやって……」

パパは土くれを両手で握りしめ、目を閉じた。

「過去というものは、手で握れるし、つよく握ると崩れるのさ。この秘密を知ったら、もう、あとにはひけないよ。スコップで穴をあける。するとそこが明るい水色の覗き穴になって、パパが現役で活躍していた頃や、小学校の頃、いじめっ子にパンツをぬがされた光景や、お婆ちゃんに物差しでお尻をぶたれたことや、パパとママがはじめてキスしたときの事が、ビデオみたいに浮かびあがるんだ。何だか、自分を掘り返しているみたいでね。不思議なことだよ」

パパの指が、長い影絵のように土の壁に映っていた。穴の壁面に若いパパとママが並んでいる光景を思い描いた。湘南の浜辺で写したという、古い色あせたアルバム写真が思い出された。

「あたしも土を掘ったら、そうなるかしら。生まれるときが見たい」「まあ、それにはある諦めが、必要だろうね」とパパ。「諦め？」「……別の人生なんだよ、これは。要するに、いままでの四十何年間を否定して、別の人生を始めたんだよ、パパは」

わたしはパパに悲しい「男の子」を感じた。悲しそうに遠くを見ているパパを見ると、何だか頭を撫でてやりたくてしょうがなくなる。わたしが小さいとき、パパが病気のときや怪我をしたときは、実際にそうした。石や岩のしんみりとした気持ちが、しみてくるような気がした。裸電球のフィラメントが美しくて悲しい。

「もう、クヨクヨ考えなくなったんだ。土の力がそんなものを吸い取ってくれるんだね。穴を掘る前は、無価値な者になったようで、辛くてしかたなかったんだ。何というのか、そう、地球の力、だね。そうだまだ美穂は、奥を見てはいないだろう」

パパはわたしの手を取り、ビニールの覆いをあげた。
ペンライトと懐中電灯で斜め横に掘られた穴を照らすと、人の喉の奥のように赤黒くでこぼこしていて薄気味悪い風景が見えた。粘土質の不器用に作られた短い階段を過ぎると、白い砂が敷き詰められた四畳半ほどの半円形の部屋があった。真ん中には小さなテーブルが置いてあり、その奥には冷蔵庫があった。でもそれはまだ収納具として使われているだけで、電気がつながってないようだった。これらは全部、粗大ゴミの中から集めてきたものらしかった。わたしとパパは、おしくらまんじゅう状態になった。
「たとえ核爆弾が炸裂しても、ここまでは影響ないと思うよ。ほら、こうやって寝ることもできるんだ」「よくここまで作ったね。ママもお婆ちゃんも、こんなの、全然想像もしてないと思うよ」「あんな保険会社に勤めるよりは、一生こんな穴を掘って生きていたよ。創意工夫は生かせるし、誰にも迷惑がかからない。四十年間穴を掘り続けていたら、かなりの仕事ができる。どんなに凄い地下の迷路ができたろうねえ。ひとつの、アートだよ」
外は猛暑でも、土の中意外にひんやりとしていて、頭まで冴えてくる。ここで勉強をやろうか。一段高くなったところがあり、そこに座ったり横になったりすることもできる。パパは実際にそこで目を閉じて眠るような恰好をしてみせた。美術本の痩せたキリストみたいだ。
「まるでプレーリードッグね、パパは」とわたし。「小さな子犬ほどのプレーリードッグは、オーストリアの地下の凄く広い地域に、穴を掘っているんだって。親戚や仲間で住んでいて、その地下都市は、日本の九州ほども広いんだって」「そこまでやっているのか、プレーリードッグは」パパの感に堪えたような声。「学校やめて、穴掘りを手伝おうか。親子そろって掘れば、凄いのができるね」パパは人差し指をわたしのほお顎に当てて、「穴を掘ることの意義というのは、実際に孤独の中で、何日間も人に会わず、掘り続けてみなければ、決してわかるものではないのだよ。もう昼なのか夜なのかわからない、自分があの望月直樹なのかどうかもさだかではない、そもそもまだ人間なのか、モグラや昆虫や幽霊でないという証拠があるのか、そのくらいの朦朧とした状態になって初めて、穴掘りという行為の深さがわかるものさ。だから自分の狭い地上的な判断だけで、穴掘りを貶めて考えたりしてはいけないのだよ」「べつにおとしめてないよ」
「……もし、途中で死んだとしても、ただ地下に死体がひとつ横たわるだけさ。誰にも迷惑はかけやしない。地下で孤独のまま腐り、虫や微生物たの栄養となり、卵を生みつけられ、滋養の豊富な土へと解体していく。それだけのことだ」
パパとわたしは壁に並んで座っていた。
「この設計図に書き足された部分を見てごらん」
パパは冷蔵庫から、折り畳まれた大きな灰色の紙を取り出した。そこには、手袋の指のように幾つかの方向へ伸びた坑道が存在し、点線をたどっていくと高木さんの家や諸星さんの家の縁の下につながっていた。
「世界はどんどん悪くなっていく。もし万が一、北朝鮮から爆弾が来ても、自分たち家族だけが助かろうとしていない。いくら馬鹿にされたってね、いざというときは最後の一堀りで、高木さんや川田さんの庭からも、このシェルターに逃げ込むことができるんだ」パパは疲れたような顔でいい、がっくりとしゃがみ込んだ。病気だろうか。
「最近パパはここで、執筆をしているんだ。裸電球だけじゃ暗いけどね」
棚から黄色く変色したぼろぼろのノートを取り出した。
「……『私の生き方』」
「パパの著書のタイトルだ。どうやら、もう一冊分ぐらいにはなりそうだけど」
奥の部屋を出て『穴』上を見ると、遅い午後の銀色の丸い空に枝が張り、そこにはいない尾長鳥の声が響いていた。パパは疲れたから少し眠るといった。わたしも眠った。　ここにいると時間の感覚がわからなくなる。このまま、土になってもいい。

首領様の死

七月六日。テレビの様子が変だった。
どうやらきのう、金日成が死んだらしい。
パパは『穴』の中に潜ったまま出てこない。パパはラジオを持ち込んでいるはずだ。

空騒ぎ

　金日成が亡くなってしばらくしたある日、わたしが塾の夏期講習から帰ってくると、家の庭で何やらわめき声が聞こえてきた。木戸を開けるとあたりいちめんの芝生に水しぶきが飛び散り、きらきらと輝き、藤棚の下に小さな淡い虹を作っている。
　ママが半狂乱になって、ホースを握りしめ騒いでいるのだ。ホースはうねり、それ自体の力を持ち、ママの手から離れてあっちこっちを蛇のように走り廻った。それでもママはホースの先端を脇の下に抱え込むと、消防士のように花壇の中を這い進んでいく。おかげでせっかく作ったグラジオラスやダリアの花が、大きく折れ、痛々しく赤や桃色の花を散らした。ママをとめようとしているお婆ちゃんは、スカートまで水びたしになり髪の毛をばさばさにして、裸足でしきりに叫んでいる。
「美穂、ママを、ママを何とかして頂戴」
　ママは凄い形相で『穴』の上に立ち、ぜいぜいと息をしながらホースの水を中に流し込もうとしている。夏の真昼の太陽がママの後頭部に照りつけ、髪の毛を黒い焔のように立ちあがらせている。
「そっちが狂ったふりをするなら、あたしだってそうしてやるわ。何でうちだけ、こう不幸なの。何から何まで馬鹿げているわ。いい年して、鬼ごっこやっているつもり？　そんなに世間から逃げていたいんなら、いいわ、一生出られないようにしてやる。ええ、そうしてやりますとも」
「やめなさい、咲子さん。あんた直樹を、殺す気？」
「いえいえ、ここまできたらもう聞きません。お母さんが何とおっしゃろうと、もう引きません。あたしはもともと、自由奔放な女だったの。学生時代は、キミはフランス映画のヒロインみたいだっていわれたこともあるのよ。嘘じゃないわ。聞いてみればいいわ。それが何？　いまじゃ、外出するのにもいちいち文句つけられなきゃならない有り様だし、夫は穴に閉じこもるし、娘は馬鹿だし、家風は封建的だし、生きてていいことなんて、何もありゃしない。どこの世界に、失業して自分で掘った穴に閉じこもる夫がいるもんですか」
「咲子さん、あんたよくもまあ、そこまで言えたもんだねえ。大学生と夜遊びはするし、朝帰りだってしょっちゅう。二日酔いで朝食が作れないなんて、あんた朝飯前じゃないの。家風が封建的？　家風なんてウチにあるわけないじゃないか。勝手に話を作らないでよ」
　ふたりは『穴』の上でホースの先端を奪いあっているので、隣の高木さんの家まで水が飛び、屋根に当たってドドドドッという凄まじい音を響かせた。すぐに子供たちが窓から顔を出し、しばらくして高木さんのおばさんが血相を変えて現れた。
もう庭じゅう踏み荒らされた跡で、植木鉢は倒れているし、廊下まで濡れている始末だった。
「パパ、ここにいるの？」
「昨日から出てこないよ。あの子、思い詰めるたちだから、まさか金日成に殉じて即身成仏でもするつもりじゃないだろうねえ。美穂、ママを後ろから羽交いじめにして」
「痛いッ。美穂、あんた、誰のおなかから出てきたの。ママの敵なの。ちょっと、やめて。全部、パパとお婆ちゃんが悪いの。すべては、ママを不幸にする陰謀だったのよ。二十年も仕事だけの男にかしずいて、その結末がこのザマよ。高木さん川田さん、笑ってあげてください。世間のみなさん、さあ、わたしを存分に笑うがいいわ！　ああ、何て不幸なわたし」
「やめなさい、咲子さん。やめなさい」
「やめてよママ。これ以上恥ずかしいことだけはやらないで」
　わたしたちは親子三代、泥と汗と涙にまみれ、三つ巴になりながらどっと穴の中へ崩れ落ちた。
　すると突然、泥人形のようなものが、『穴』奥からむっくりと這い出してきた。パパが真っ黒い顔をして、両手の指を五本ずつ開き、ゆっくりと口を開いた。
「……なにをやっているんですか。非常識な」

パパはますます『穴』の奥へと閉じこもることが多くなった。

金日成が死んで以来、穴を掘ることの目的の半分以上が消えてしまったけれど、それは純粋な行為としてに、パパの生き方そのものになってしまったようだ。つまり『掘るために、掘る』ことであり、『掘ることが、生きること』になってしまったのだ。もし庭を、レントゲンで透視できたら、地中にどれくらいのトンネルの迷路が張り巡らされているだろうか。それはいまや、この庭の癌のように、手に負えない代物となっていた。

わたしたち家族は、もうパパのいないことが当たり前の生活のパターンだと諦め、しだいに明るさを取り戻していった。ただお婆ちゃんは先日のホース事件以来、心臓の具合があまりよくないし、そのせいかグチっぽくなり、ひどく気が弱くなってしまった。

年齢のせいもあるけど、あの毒舌家もめっきり口数が少なくなり、ぼんやりと庭を眺めていることが多くなった。

「あたしは何だか、直樹が穴を掘りはじめてから、自分が責められている気がしてねえ。育て方が間違ったのかねえ」

以前よりひんぱんに心臓の発作を起こすので、来週また検査に行くらしい。

ママの誘いで、この間はわたしたち女三人で、那須の温泉にも行った。

どうやらむママとお婆ちゃんの休戦協定ということらしい。それでもパパのご飯は忘れずにちゃんと作るし、『穴』の入り口に置いておけば、ぴかぴかになめたお皿がきちんと返ってくる。

たまにパパが地上に現れるときは、それでもみんなひどく緊張した。何だか毛のいっぱい生えた雪男か何かの怪物が、村に降りてくるみたいなのだ。そのときは一応、ちょっとしたごちそうを作ってあげる。

「地下深く、掘れば掘るほど……」

とパパは物凄い悪臭を放ちながら、テーブルの真ん中に座り、おごそかな声でいった。

「家族というものがわかってくるんだ。……思うに、世界はますます、危険水域に入ってきたようだ。金日成は死んでも、金正日がいるからな。しかも、死んだのは偽物であり、闇の中から、国をコントロールしているという情報もあるんだ。もはや、のっぴきならない状態になってきた。しかし、望月家の地下移住計画の方は、七割ほどまで進んでいる。……もうすぐだよ、美穂。パパは必ず、家長としての義務をはたす。最近はますます、頭が水晶のように澄み切っていて、すべてがお見通しだ。……今後を、期待して欲しい」

貯金があるので、もうしばらくは生活していけるだろう。わたしはそのうち、親に内緒でこっそり働き始めるかも知れない。

「ありがとうの言葉を大切に。明るい未来の笑顔を作る。—大東亜生命—」

テレビで会社のＣＭをやっていても、誰も顔をあげない。しらじらしく不愉快な気持ちになって、すぐにチャンネルを廻してしまう。

いちばん元気なのはママだった。大学生としょっちゅうカラオケやドライブに行っている。十月からは、その新井という大学生をわたしの家庭教師にするつもりらしい。

「勉強の秋よ。来年に向けて、ラストスパートねッ」

わたしは相変わらず爪を磨いたり、ぽりぽりと首すじを掻いたり、あくびをしたり、丁寧に脇の下の処理をしたりして過ごしている。

この間の夜、わたしはひっそりとした庭で、お婆ちゃんの圧し殺したような声を聞いた。

「直樹、直樹。……あたしに何か手伝うことがないかい？　新しいスコップを二本、買ってきたんだよ。掘るだけだったら、あたしにもできないことはないだろう。直樹、直樹、トンネルはどこまで届いたんだい？　もうじきあたしも、お世話にならなきゃならないようだよ。どこか端の方でいいから、入れる場所を、作ってくれないかい」

月の下で、お婆ちゃんの痩せた姿が、紫色に浮かびあがる。わたしは雑誌を広げ、ベッドの上で寝そべりながら、重たいグレイを抱きあげる。

コオロギがとぎれるように鳴き、あたりには秋の冷たい水みたいな空気が漂い始める。

（了）

地下聖家族

http://p.booklog.jp/book/22090

著者 : Grasshouse
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/22090

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/22090

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.